

# 救護班の診療場所と宿泊場所がない(基盤整備に終始)

## －速報 新潟県医療救護班 災害拠点病院等 第1班

新潟県医療救護班 新潟県立十日町病院

塚田 芳久

災害名：東日本大震災  
 派遣先：宮城県石巻市  
 派遣期間：2011年3月29日～3月31日  
 活動内容：情報収集、診療所開設（石巻市立女子  
 高校）  
 宿泊地確保（永井いきいき交流センター）

### 〈被災地状況報告〉

交通：高速道路・ガソリン補給用の災害通行許可証は警察から発行されず東部道路から石巻への高速道路は一部閉鎖

宿泊地確保のため石巻市周辺市町村を数十キロ走る。通行止め多く回り道繰り返し、陥没や段差も随所にあり不案内な夜間走行は危険。北上川渡河のために10km以上の迂回を余儀なくされる。被災地域では停電のため信号機機能せず、道路に瓦礫も多く常時渋滞状態で朝夕移動に時間要す。

ライフライン：津波区域は水道・電気・ガスともに復旧せず。簡易トイレ使用を含め、衛生状況は劣悪。

環境：津波区域にヘドロと瓦礫は放置、乾燥すると粉塵が舞い、雨が降ると自転車の車輪に絡まり運転できない状況。

避難所：後始末のために、衛生状況の悪い津波地域に残る人多く混雑。

災害対策本部：石巻地域医療コーディネーター石井外科部長がGMとなり、全国数地域の赤十字組織が1週間交代で、本部メンバーとして入り災害対策本部を運営している。

救急対応：点滴治療や検査などが必要であれば、全国から派遣された救急車で石巻赤十字病院へ搬送する。赤エリアは石巻赤十字病院スタッフが、黄・緑エリアは支援医療チームが担当していた。4月1日から石巻赤十

字病院スタッフのみで救急対応、予約外来再開へ向かう。外傷や破傷風発生の峠は越えたが、平均救急受診者350名/日、救急搬送受け入れ80台/日は減少せず。

処方・薬歴：慢性疾患の長期処方箋は石巻赤十字に送り薬歴が蓄積され、石巻市薬剤師会ボランティア組織（メロンパンチーム）が避難所に処方薬配布サービスの新システムが運用されている。

食事：外食はカレー専門全国チェーン店が再開されたのみ、被災者用の食糧配給は多いが、支援者は病院での飲料調達以外は困難。

給油：警察発行以外の災害通行許可証は給油に無効、災対本部の助力要す。

宿泊：3月30日から石巻赤十字病院内の宿泊は禁止となり、9か所の宿泊施設が災対本部から提示されたが、それぞれ10km以上あり。候補先に連絡するが要領得ず、2か所ほど現地見るが条件悪く、3か所目の「永井いきいき交流センター」が施設・ライフライン（水道・ガス・電気使用可能）から、最適と判断し、災対本部を通じ新潟県2チームに1か月連日使用を申し込み許可得る。長野県と同宿となり、灯油利用など協働行動する。

### 〈診療所開設〉

○災害対策本部に登録後オリエンテーションを受けた。新潟県は第4エリア（全16エリア）に入り、エリアリーダーである兵庫県医師会に従うよう指示。「4エリアの石巻中学に兵庫県医師会が、門脇中学に佐渡チームが診療所を稼働し、石巻高校には市立石巻病院と石巻市医師会が入り、医療班には不足はないが、石巻市医師会は撤退計画があるようだ」との情報。

○門脇中学に佐渡のチームを訪ねると、「ここは1チームで十分」、石巻中学にエリアリーダー兵庫県医師会を訪ねると、「佐渡のチームと門脇中学の診療所を運営するように」と指示された。エリア内を毎日巡回し、ニーズを聞いて新需要はないが、「石巻市医師会が撤退するなら入ってよい」と指示を受ける。

○石巻高校を訪ねると、水没した石巻市立病院医師が仮診療所を開設「撤退予定はない」とのことであった。

○診療場所に窮し、エリア4内避難所の巡回を開始し、市立女子高を訪ねると「ここは見捨てられた避難所です。被災から2週間以上経ったが、炊き出しが1回もない。医療班は時に来るが、当てにならない。」と言われ、臨時診療所を開設し10数名受診者あり、30日の診療も依頼された。

○災害対策本部に市立女子高の状況報告し、30日昼には炊き出し隊が入り、継続診療が許可となる。31日には新潟市民病院により常設診療所が設置され、更に衛生状況が悪い住吉小学校の存在を伝え、その後追加の診療所になる。

〈現地情報収集・医療班支援体制について〉

現地災害対策本部は宮城県より全権委任され、災害救助活動は地域独立型運営であった。したがって、新潟県と宮城県の行政上交渉は形式的なものとなった。今回派遣は、その後の医療班のための診療体制構築や宿泊地確保など災害支援基盤整備に終始した。現地状況は刻々と変化しており、現地本部を設置し情報収集しながら、医療班支援体制を構築することが重要と考える。